

第二五九号 (No. 259)



日本山岳会

昭和四二年(1967) 一月号

目次

- フォーレル峰登頂 池田錦重……一
書物のゆくえ 小林義正……四
「山岳」編集一言 望月達夫……五
ヴィンソン登山隊 村山雅美……六
「追記及写真提供」 吉沢一郎……六
「Correspondence」 G. Converse……七
会員通信……八
ブータン(西岡京治)、ACC訪問他
(織内信彦)、欧州より(風見武秀)
「アラスカ便り」(芳野越夫)……九
故森本次男氏浮彫 阿部恒夫……九
年次晩餐会 山崎安治……一〇
図書紹介……一一
The Sierra Nevada
中部ネバール報告
支部情報……一二
東京・東海・石川
☆新名譽会員紹介(13)
☆新永年会員紹介(14)
会務報告(13)、会員異動(14)
新入会員(15)、横尾谷避難小屋(5)
余滴(9)

「マウント・フォーレル登頂」

池田 錦重

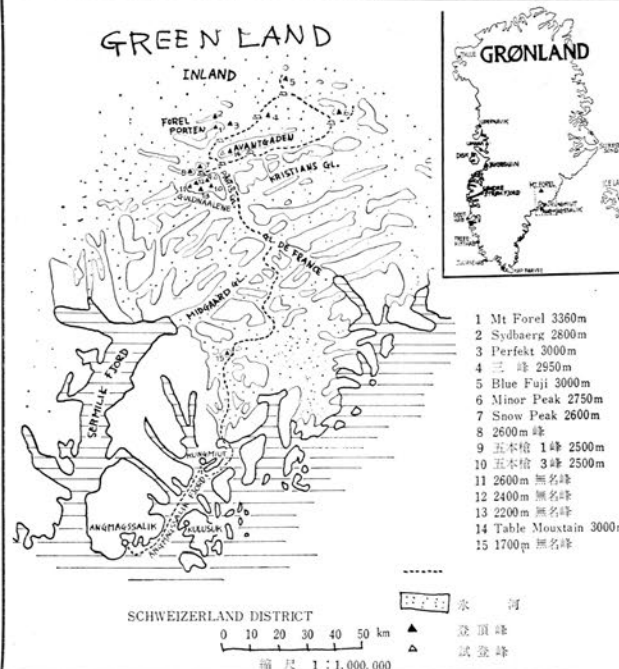
B・Cへの行進

長かった氷河の旅をおえ、八月二〇日全員元気に上陸地点の Storliik に帰ってきました。今年は幸い奥地で好天に恵まれ、七月二七日には第一の目標 Mt. Forel に全員で登頂(第二登、八月九日には第二の目標であった Avantgarden の秀峰 Table Mountain の初登頂に成功しました。

Augmagsalik 迄の航海については、前便(会報二五六号参照)にてお知らせした通り、途中のグリーンランド海流に今年は予想以上の流水があり、六月一八日にコペンハーゲンを出

航してアンマグサリクに六月二七日に着くという長い船旅となりました。ここから Storliik の上陸地点までは、昨年乗った Ennor Mikkelsen (100 Ton) に便乗をゆるされ六月三〇日流水でつめた「Augmagsalik Fjord」を六時間の航海ののち、このフヨルド最奥の部落 Kungnuit に着き、ここでもまた一〇屯の機帆船にのりかえ、昨年と同じ Storliik に向いました。ここからフォーレル南面の麓までの

機を曳いての旅は、ルートがわかっていとはいい、前半の Midgard 氷河までは天候に恵まれず、一日おきにくる悪天候による停滞と、回復しても曇りのため、気温が下らず、雪が縮らないため、機が思うように進まず、その上、海岸近くの氷河のバドル地帯で、機



の滑走材を三ヶ所も折るという不始末をして、計画の縮少まで考えました。しかしこの機材の故障も昨年の隊の残した各キャンプ地の残骸を利用することとどうにか曳けるようになったことと、後半から天候がもちなおし、雪の状態も良くなり、進めるだけ進もうという峰の山麓に最終キャンプを設営することができました。海岸からここまで二五日かかったというわけです。(昨年は二十三日間)

このキャンプ地は、昨年より更に奥に入ったところで、ここからフォーレルの頂は全然見えません。しかし南方には Avantgarden の山塊が立ちならび、すぐキャンプ地の背にあたるころは Piaz(2,900 m)、Table Mountain (3,000 m) が美しい姿でたっており、三段階で計画をすゝめることになりました。

第一は全員によるフォーレル峰の登攀。第二は Avantgarden 山塊の登攀。第三は隊を二つに分け、一隊は奥地のアイス・キャンプに入って未踏の山塊を探り、他の一隊はフォーレル付近の山塊で山登りをする。

フォーレルの登攀

こうして翌七月二七日全員で登頂を試みることにして零時にキャンプ地をあとにする。取付きの氷河は急ではあるが、下部は簡単に登る。しかし上部は勾配が急で青氷になっていたため、氷河のつめに 100m 程ロープをフィックスして登る。登りきると初めて我々の眼前にフォーレルの頂が現われてきた。ルートはここからさき、Snow Dome と Ice Dome (3,000 m) と呼んだ二つのピークがあり、そこから一たん Snow Col と呼んだコルにあり、そこから細い雪と岩まじりの急なアレ

ートを登ると頂上である。

さて我々はスノー・ドームまでは簡単に登り、さらにアイス・ドームの頂までは昨年同様不安定な雪のついた細い氷のリップを登る。次のコルへの下りはアイス・ドームの頂に 50 m のロープを一本フィックスして下り、さらに下部は急な岩場となりコルに切れおちているため、ここにも 50 m のロープを一本フィックスして懸垂で下る。コルから氷帽のふちまでは岩と雪の中にルートを運び、スタカットで登る。氷帽のふちは急な氷化した雪の斜面となっていたため、さらに二ピッチ程スタカットですゝみ、そこから全員そろって歩き頂を踏む。時間は午後三時であつた。頂上は平らではないが非常に広いところで、一九三八年に初登頂したスイスの Andre Roed がフット・ボールの競技ができるような所といったこともうなずける。天候は午前中は Table Mountain の上に雲がかかり強風が吹いて心配したが、今は、全くなくなり快晴となり、周囲の景色が素晴らしい。頂上では、これから向う奥地の山やルートを調らべたり、写真を撮ったりして時を過ごす。一時間後頂上をあとにする。下りはスノー・コルからアイス・ドームに登るチムニーのある岩場では予想外に時間がかかったほかは、意外とスムーズにすゝみ、キャンプ地には二八日の午前一時に戻る。二五時間の行動であった。

シドビヨルグ、パフェクトの登頂

七月二八日は全員休養をとり、翌二九日隊を二つにわけ、一隊は池田、五月女、神崎で東からフォーレルの北面にまわりこみ、Sydborg (2,800 m) に登り、他の一隊、中島、尾上「三好」はフォーレルの東面にまわり Andre Roed の登った Perfekt (3,000 m) に登り、フォーレル山塊の写真をとる。



Angmagssalik を分けて Pack Ice (2,200 ton).
Greenland 沿岸の氷砕船 Nella Dan に向う

が幾つか立ちふさがり、側面も逆層の急なスラブになっているためあきらめる。一方 Pilz の方は百m程から垂直の岩壁となり、そこからゆるい岩稜となり途中二つの小さな岩峰を経て、頂の水帽まで続いている。コルの岩壁は垂直のためルートの対象にならないので、北面から廻りこむべく池田、尾上の二人で六ピッチ程登ったが、約100m程登ったところで氷壁にぶつかり断念する。

一方 Ice Cap からの偵察隊の報告でも、池田隊の登ったルートを除いては北面からの Avantgarden 山塊の山々に登るルートはないということなので、種々検討の結果第二次の計画は取り敢えず中止して第三次の段階に入ることにする。

フォーレル峰の奥地の探索
第三次の計画では池田、五月女、神崎の三人でフォーレルより、なお奥地の山を探り、中島、尾上、三好の三名で、フォーレルの南々西にある Guldnaalene 山塊で山登りをするにしようとして、各隊八日間の日程で、八月一日出発することにした。

奥地の隊は十日分の食糧と装備を機に積み、Avantgarden と Bobbeltharneret の間の氷河を登り二六〇〇mのアイス・キャップの台地にてキャンプする。そして近くのヌナタックに登る。二日はそこからさらに北緯 67°02'

アヴァントガルデン山塊の試登
次の日三〇日から計画を第二段階にすめ Avantgarden 山塊の山々をねらうことにする。第一隊の池田、五月女、尾上は北面から一番登頂の可能性のあると思われる、Pilz とその西にある無名峰の間の氷河から両峰をねらうことにする。

第二隊の中島、三好は Avantgarden の北東面の高き Ice Cap の台地からなおよく Avantgarden を偵察することにする。Pilz と無名峰に向う取付きの氷河は下部が Ice-fall となっていたが、幸いこの氷瀑は取りつてから三時間程で抜け、更になだらかな雪の谷をつめてコルにすることができた。コルからみた無名峰への登攀は、急な岩稜とかぶり気味の小さなピーク

西経 30°15' の標高二五〇〇mの水原にキャンプする。翌三日は、そこからなお北に 5km 程行ったところにある側面が青氷の美しい台形の山 (Blue Fjell 3,020m) に登り、頂から奥地をみる。

奥地はここよりさらに 5km 程北上した所に大きなヌナタックが一つあるきり、あとは白一色のアイス・キャップとなっている。それ以上北上しても仕方がないので、こゝでフォーレル峰から直線距離にして東方に 5km 程離れた地点に離る、三〇六〇m という大きな山塊があるので、その山塊を探ることにし、八月四日は東南に 30km 程を進め、三〇六〇m 山塊の南端の一九〇〇m の水原にキャンプする。そして翌五日は南端から南東面にまわりこみ、一番南端で一番高い岩峰二七五〇m (マイナー・ピークと呼称) に登頂する。主峰の登りは時間がかかりそうなおことと、手持の日数が少なく、且つ十分な登攀用具もないのであきらめることにしこゝより約束の Paris 氷河の待ち合わせ地点に引返すことにする。こうして六日は Kistlavas 氷河の北にある山脈に沿って歩く。そして途中二四〇〇m の峠を越え、Avantgarden 南面の氷河に入りこむが、Avantgarden の最高峰三二四〇m の下で大クレバスにひたかり止むなくキャンプする。翌る七日はこの谷がクレ

バスの多いのに気をつけて、日の出る前に行動してしまわないと動けないため、早朝から行動し、Avantgarden の南面をみながら歩き、待ち合わせ地点の Paris 氷河のデポ地までいそぎ六時に到着する。Guldnaalene に向った隊は未だ戻っていなかったが、彼らもこの日午前八時三十分頃、予定より一日早く戻ってきた。

グルトナールン山塊での登攀

この山塊へ向った中島隊は、八月一日、このデポ地の上のデポ地にキャンプし、二日はそこから Guldnaalene の北にある二六〇〇m の Snow Dome に登り、三日はこのデポ地を下り、ここから Guldnaalene 山塊に入った所でキャンプする。四日は二日に登った二六〇〇m ピークのさらに南西にある二六〇〇m の Snow Peak に登る。



Guldnaalene 山塊

五日はこの山塊の中央の五本槍と名づけた第一峰 (3,600m) と第三峰に登り、六日はこの山塊の一番西にある山に向い二五〇〇m のピークを初めとする、三つの山に登る。七日はキャンプを撤収して約束の Paris 氷河のデポ地に帰ってきた。

英国隊との邂逅

翌八日は全員休養とし、八月二日に Guldnaalene の隊が登った Snow Dome の途中までスキー・ツアーをする。そして翌日の八月九日は、隊を二つに分け、一隊は池田、五月女、神崎の三人で Avantgarden 南端で一番登攀の可能性のある Pilz と Table Mountain の間の谷を偵察し、できた三登の隊と、他の一隊は中島、尾上、三好の三人で Guldnaalene で登り残した最高峰 (3,700m) の取付き氷河のアイス・フォーレルを偵察し、これもできたその場で登攀するということでかけることにする。

しかし八日の晩突然英国の Imperial College の人々が訪れてきく一時間程、我々の天幕の中で話をした。それによると彼らの天幕は我々の天幕地より十五分程上の所にあり、今日はこれから Guldnaalene の最高峰に登りにゆくというところで、その途中偶然に我々の天幕をみつめて訪れたとのことである。彼らのベース・キャンプは Quervains Bjorg の麓の Paris 氷河の上に張られ、荷物は Iceland Air を使い、海軍から落下傘を借りて、パリ氷河の上に投下したとのこと。そして人間は全員八名で海岸から歩いてきたとのこと、しかし隊長が、Midgard 氷河への下りでクレバスに落ち、足を骨折し、Midgard の上の峠に天幕を張り四名が残し、他の四名でパリ氷河まで入って落下傘で散った荷を三日がかりで集め、Quervains Bjorg の下

にベース・キャンプを作った由。その後、Pointe du Harpon (2,940 m)に登り、更にキャンプをこゝにすゝめ、から Table Mountain と Guldhale 最高峰をねらっているとのことである。思わぬところにライバルが現われ初登攀争いが行なわれることになった。一時間の休憩の後彼らは、予定通り Guldhale の最高峰へ向けてでかけていった。

テーブル・マウンテンの初登頂

英国隊が現れたが、我々は翌九日予定通り二隊に分れて出発することにした。しかし乍ら Guldhale の方は英国隊が既にこの日の朝頂に立ち、アイス・フォールの取りつきでその帰路に出合つたので、同じルートに登って仕方がないので中止する。

“Tetsu” とあるカットは、
鉄指公蔵氏筆（独立の會員）
加納一郎氏提供



とクレバス帯になったが、狙いを付けて上手く登る。上部にゆくに従い、両方の側面がよく見え、ときどき、Pila の方は逆層の岩場となり、とても取付けそうもない。

しかし Table Mountain の方は、頂から南に大きな尾根が伸びており、その尾根の側面が登れそうに見えるので、この谷をつめてコルから数えて三本目の側面に取付く。そして初めはガラ場、次は岩稜となり最後は浅い氷のルンゼとなり、稜線に消えているところを登る。

ここ迄はあくまでこの日は偵察のつもりでいたが、稜線に一二時につくという早いピッチだったため、こゝで初めて頂上を目指すことに計画を変更する。しかし稜線は歩きだすとまもなく一〇〇m程の高さをもつ岩峰にぶつかり、なお水幅までこの様に岩峰がいくつあり、とても不安定な坐り方をした岩で、ピッチ登ただけで引返し、西面の岩峰の基部をトラバースすることにする。これも初めには雪の斜面を、途中から急な逆層のスラブの上を一時間半程歩き、途中よりまた急な水の斜面にステップを切りながら稜線にもどる。この稜線に出たところは水幅の手前で、その間にコルがあり、細く両側に切れた雪稜でつながっている。ここを通り、最後の氷幅は右手に岩をまきぎみに水幅のふちにする。ここから頂上まではゆるいクラスとした雪面を三〇分程登るだけよかった。時間は午後六時で、太陽は水平となり、海岸線の山々が夕陽で美しかった。

頂上には三〇分程滞りて写真を撮影したあと下る。帰路は急な側面を下りきった頃か暗くなり、暗やみの中をトラバースして零時に稜線に戻り、なお、ゆるい側面を下りだす。天気はこの頃より悪化し、霧雨が降ってきた。途中より小雪になったが天幕には朝の五時に着することができた。

海岸線に戻る

この日今後の日程を検討した結果、食糧も底をついてきたので、明八月一日天幕を撤収して海岸へ戻ることにする。しかし正午に英国のキャンプに帰りの挨拶にいくと、彼らも食糧がなくなり、天候も悪くなってきたので、協議の末、今日一緒に彼らの B・C 迄引き上げようということになり、一日の午後は天幕を撤収してその B・C まで下山し、隣りにキャンプする。そして彼らの計画変更により余った食糧を御馳走になる。翌一日彼らの B・C をあとに帰途につく。帰路は昨年と同じピッチで海岸まで戻る。途中 Midgard 氷河の上の峠で英国隊の隊長とあい、お互いの無事をねがいながら別れる。なお、Col des Poiles ではコルの西にある二、七〇〇mの山に中島、池田、三好で登る。頂上には今年我々がくる時に一緒になったスイス隊の Zurich 出身の Gutscher Max が一九六三年に初登頂した時の晝置がビンに入っており、その裏に今年フォアレルに向うことになっていたスエーデン・ノルウェー合同隊の二名の隊員の名が書きこんであつた。我々もその下に名前を書き込み頂上をあとにする。こうして八月二日、全員無事上陸地点の Storvik に帰着した。

外国隊の動向

翌八月二日、三名が Kungnuit に連絡にゆき、小型の機帆船をチャーターし、その日のうちに全員 Kungnuit に引きあげ、小学校の校舎を借りて泊る。

こゝで土地のデンマーク人の先生から英国海軍の遠征隊の事故を初めて聞く。彼らは三月に Kungnuit にきてエスキモーの大船を使い、Midgard 氷河の上の峠に相当多量の食糧と装備をデポして、七月に全員一二名の隊員構成で、海岸から歩いて入り、Midgard 氷河の北側にある山塊で登山を行なったが、登山中に二名の隊員がクレバスに落ち、一名が死に、他の一名も重傷を負うという事故に遭つた。残りのメンバーはなお奥地で登山中とのことである。

二日は中島、神崎、尾上、三好が Kungnuit から Angnagsalik に帰り、残った池田、五月女も翌日部落の写真撮影をすませて Angnagsalik に帰った。

このあと、世話になったところに帰国の挨拶にゆき、Berg Sørensen の家で、今年 Ice Cap を横断したフィランド隊の顔を聞く。話によると彼らは二十数頭の犬を使い、Angnagsalik から Søndre Stromford までは三九日もかかり、昨年の Simson の隊と同じ日数で横断したが、Søndre についた時は一頭の大しか残っており、それに加えてグリーンランドにきてオナビヤ氏から教わるまで天測の器具をもつていながら使える隊員が誰もいなかったり、又途中の Ice Cap Station に寄る計画にうまくならず全然連絡をとらずに Søndre に向つたため、Greenland の関係者は心配して、一時はアメリカの軍隊に捜索を依頼しようという一幕もあった由で、大変に不評をかった隊だったとのことである。

又二四日 Angnagsalik を離れる日、スエーデン・ノルウェー隊の隊員が一人、我々のキャンプを訪ねてきた。彼は昨年シャモニーであった国際アルピニスト集会に参加し、日本山岳会の倉知さんや君島さんをよく知っており、また、君島の話によれば、合同隊は、我々が彼らより半月も早く Mt. Ford に向つたこと、他に英国隊が二隊も奥地に入るのを知って、計画を変更し、海岸線の De France 氷河の南側で山登りをして帰ってきたとのことでした。

この他に、スイツァーランドの一番南の海岸付近で山登りをしているデンマーク隊、デンマーク・イタリア合同隊、植物採集が主なオランダ隊、De France の北側で山登りをしているス

イス隊がありますが、彼らは未だ山を下りてないので全然情報はわかりません。

コペンハーゲンに

八月二四日 Angnagsalik から船で Kulusuk に行き、こゝから飛行機で Ice Cap の上を飛び、その日の夜 Søndre Stromford について泊り、翌二五日、サンフランシスコからきたジェット機でコペンハーゲンに帰ってきました。

コペンハーゲンでは、デンマーク山岳会会長 Erik Hoff 氏を訪ねお世話になったお礼をい、そのあとドイツの北極横断隊の話を書きましたところデンマーク政府はグリーンランド北部のペアリランドに多量の石油と、それを運ぶ輸送機関が現在のグリーンランドにはないということを理由に、今年ドイツ隊がペアリランドにデポの基地を作る計画は断られたそうです。それ故ドイツ隊は計画を変更して、カナダの北極に近い島から来年北極を横断するという話です。また今年デポの基地を作る隊員は、計画が中止になったので、四名の隊員でスターニング・アルプスに入つて現在山登りをしていとのことである。

このあとグリーンランド省を訪れ、今年の報告を行ない、来年の横断隊の許可につきお願いしました。

Evelio Frick Hoff 氏によればグリーンランド省は、遠征隊の事故に気がつかっており許可については、慎重に行なっている様であるが、我々の場合は、昨年と今年の実績があるので大丈夫でしょうとのことでした。

(九月二〇日付、ベルリンにて)





故 山川勇一郎氏筆

書物のゆくえ

ギド・レイで
憶いだすこと

小林 義 正

ギド・レイの著作のうち、もっとも代表的なのは、「マッターホーン」と「アルビニズモ・アクトロパチコ」であることはいうまでもない。マッターホーンといえは、誰れしも想起するのがウィンバーであり、次いでチンダル、グロブ、マンメリらの名である。そしてフルッケン尾根の初登攀者ギド・レイを想う。

「マッターホーン」の原著は、一九〇三年イタリアのミラノから出版された。彼が、終生、熱愛してやまなかったマッターホーンの精細な歴史的研究と、山麓の部落や山人のこと、さらに初めてこの聖山に接した感激から、九年間の歳月を経てついに成功したフルッケン尾根初登攀のことなどが、深い思索と正確な観察をもとに、華麗な文章をもって綴られている。イタリアの文豪エドモンド・ド・アチミスが筆者か

ら乞われて草稿を通覧したのち、喜んで筆をとったという序文冒頭の「一つの山に一つの本」という言葉の重みをひしひしと感じさせる本である。エ・ルビーノの挿画も美しい。

「アルビニズモ・アクトロパチコ」は、この書に遅れること十一年、一九一四年に出版された。グレボン、シャルモ、ルカン、ドリニーなどシラモニーの針峰、あるいはドロマチの多くの岩峰の最難ルートに登攀記録として、特異な筆致と深い詩想がこれまた読者の心を強く惹かずにはおかない。

私は、この二冊の英訳本を所持するが、その原著をまだ手にしたことがなかった。数年前のある日、山岳会のルームで突然、日高信六郎さんから変った相談を受けた。差しだされた本は、まさしく「アルビニズモ・アクトロパチコ」の原本で、ご自身この本に寄せる愛着をこまごまと語られたのち、手にしたレイの肖像写真を挿入したいのだがということだった。写真に挿入ず、たとえば地図とか、著者の憶い出の手紙とかを、書物と一体にしておきたいと思う欲望にかられることはある。そんな場合、たいてはそのまま挟み込んでおくか、せいぜい巻末の見返しに袋でもつけて、保存の意図が関の山である。ところが、日高さんはどうしても、タイトル・ページの前に肖像写真を入れて、愛するこの本を飾りたいとの強い希望を持っておられた。正直いって、こんな製本屋とか経師屋にしても、こんな僅かなことでは失礼だが、割の合わない仕事をやすやす引き受けようとは思えなかった。しかし、日高さんは以前「山岳」に「ギド・レイについて」という心情溢れる一文を寄稿されていたことから、この

山岳詩人に寄せる思慕のひとしお厚いことは、陰ながら承知していた。下手にいちいち、折角の古典を万が一にもこののを怖れる心遣いからのご相談ではなかったらうか。ともかくお預りして、幸い知り合いの経師屋の息子を口説いて、親爺の夜なべに奉仕してもらい、どうやら責が果たしたのは、それから二、三週間後であった。

その日高さんから今年の春、まことに愉しいお手紙に接した。それによると、最近別紙のような珍らしく面白く手紙を受取った。発信人はイタリア山岳会の図書室で、大変珍らしい本を見つけた。本は二冊からなり、和紙に印刷され、サイズはこれこれ、一冊目は図版三十四とデキスト三ページ、二冊目は図版三十だけ。彼はこの本をトリノのある学校に在学中の中国と日本の二人の学生（アルビニストではない）に調べてもらった。

この本は、図書室では「シナ山」という表題で分類されていた。二人の学生は、書体が近代的でないため、正確な翻訳はむずかしいといったが、主要の部分だけ訳出した。以下それによる「著者は Nambuyaga Matoyoshi、表題は Meizuan (有名な山々の図)、発行者は Subaraya Shigehicocone, Nihonbashi, Edo, Japan, 1884」序文のなかで著者は、山を征服する楽しさと難しさを知っているすべての人々に、遠くから名高い山々の姿を知らせようとして書いた「著者は一八〇四年にこの本を書き、描かれた山の八〇四も半分は登っている」また「Baton Kawamura Hiroshi の証書がき……」とか、その他意味の汲みとりにくい個所もあるが、二人の学生による断片的な翻訳が続く。そして最後に、「この本は世に知られているか」「この本は山についての先駆者の解明として価値をもつか」「これらの山はシナか、日本か」「更に「著者の生涯について何かわかってるか」などの点について発

信者は、日高さんに説明を求め、もし必要とあれば図版の複製（写真か）を送ってもらい、と書き添えてある。もちろん、この本が谷文晁の「日本名山図会」であるぐらいのことは、わざわざ複製写真を見るまでもなく、日高さんはすぐ見抜いた。しかし、この本には元版と後版では相異があるうゑ、日中学生の共同鑑定にも怪しい点がある。そこで訳文まで添えて私に感想を求めて来られたというわけであらう。

先方の手紙に、この本は「ギド・レイからイタリア山岳会へ寄贈されたレイの旧蔵本である」と附記された奇縁にも、少なからず好奇心が惹かれた。それにしても畑違いの二人の若い学生が、この得たの知れぬ本を前に、その解明に苦心したであろう様子が行間に泌みでいて、なんとも微笑ましかった。「日本名山図会」は、いうまでもなく、天・地・人三巻からなり、先方の第一冊目というのは、図版数とテキスト（実は川本善の跋）のページ数から推して第三巻に相当し、図版だけの二冊目が第二巻の巻に当る。つまりイタリア山岳会には初巻を欠くわけである学生たちが著者と思ひ込んだ

Nambuyaga Matoyoshi とは、実は第三巻の末尾に「文化元年甲子部川元善政」と記されたのを読み誤ったものだが、発行者の須原屋之兵衛が江戸末期の著名な出版肆であることは、読書子の先刻ご存知の通り。傑作は「Baton Kawamura Hiroshi の証書がき云々」で、これも同じ巻に、磐手山を置き改め、玉東山を追加した経緯を記す「男川博識」という識文の苦心の訳出である。

先方の「日本名山図会」が元版の「名山図譜」でなく後版であるのは、この点からも間違いない。私は手許の図会本から巻毎の図版数、跋、序文の枚数と著者名などを詳記したうえ、先方が対比して理解するのに便宜なよ

う、各巻最初の図柄を薄紙に模写して巻数を示すことにした。また、収載の山、全部のローマ字読みも必要であらう。ところが、いざ書き出してみると総数九十座のうち、今日あまり登山者の興味を惹かないため正確な呼称のわからない山が幾つかあって、われながら恥しい。これらについては率直にその旨を記して、日高さんの示教を俟つことにした。

ところで、すべてこれらの事柄と、本の由来、文晁の事蹟などを、言語、歴史、風土を異にし、しかも和本の知識の全くない外人に説明するのは、一見易しそうに見えても、なみたいてのことではあるまい。現品を前にしての対談とは違い、すべてを書面で納得させるのは、まさにアクトロパチコな技術があるが、ひそかに日高さんのご苦労を察したが、それによってこの本の新たな位置づけが行われるかと思うと嬉しい。

それにしても書物には国境がない。想わぬところ、想わぬ人の手から手へそれが渡っていて、愛蔵、珍藏されている奇縁を懐かしむにはいられない。（一九六六・一〇・三〇）

◇コトヤマ高山解説◇

まだ現物を見ていないので、自信をもつてのお奨めは出来ないが、左記のような面白そうな冊子がインドで発行された。

著者 D. Mordeai, 協力、インド登山財団、内容 ヒマラヤ、カラコルム、H.K.にある六〇〇〇m以上の山、約六〇〇峰に関する解説、写真 31 頁、本文 24 頁、大きさ 15×21cm、値段 15Rs. 又は 15Rs. 送料別、注文先はヒマラヤン・クラブが安心できるでしょう。一し皆でかためて買います。

Mr. R. Lawford, Hon. Sec. Himalayan Club, P.O. Box 9019, Calcutta 16, India.



先ず最初に、加納さんは「山岳」にも誤字がたくさんあると述べているが、このたくさんといさゝかひついか。間違いが絶無だなどと、大きな口をはきくつもりもないが、たくさんはいさゝか表現が過ぎはしないかももっとも多少いかに少ないかは主観的な判断もあるからこの問題はこの位にしておこう。

次に巻頭に二番せんじの文章をのせたといいることについて。それは山岳十第五七年に載った横有恒氏の「山岳十話」と、第五八年の松方三郎氏の「山岳ときどき」を指すものと思う。加納さんはそれを岩波の「図書」で見たように書いているが、右の「山岳」にも明記されている通り、それは誤りで、前者は昭和三十七年七月下旬の毎日新聞に、後者も同じく三十七年七月から八月にかけて朝日新聞に夫々掲載されたものので、共に私が両氏に請うて「山岳」への転載を承諾していたというものである。岩波の「図書」に載ったというのは、松方さんの「随筆登山入門」

大変さし出がましいが、横さんが古く朝日新聞に書かれたクルージングの印象記を、是非入れたらどうかと進言したことがある。谷口君の賛成も得られたので、早速私は朝日新聞社に調査田栗氏を訪ね（たしか島田さんは調査研究室長をしておられた）、同氏の好意によって朝日の古い縮刷版を見せていただき、横さんの文章を筆写して、数日後谷口君へ渡しておいた。

実はその新聞記事は、たしか昭和四年頃の朝日新聞に「世界人の横顔」という標題で、何人かの人が著名な一流のひとを語った続きものゝ一つで、私は当時まだ中学生だったが、そのクルージングのものと松方幸次郎氏が語

ったモノーとの会見記とは、山登りや
絵画がとくに好きだったのが、切抜い
て保存していた。ところが横さんの方
はここになくしモノーの方だけが残
っていた。しかし、記憶にははっきり
残っていたので、縮刷版を調べたとき
も簡単に見つけることができた。序で
ながらモノーの分は後年松方三郎氏へ
差上げたが、同氏の「遠き近き」の二
四六頁以下にそのことが出ている。
横さんのタリージ翁との会見記は、
細いかい点がさだかに覚えていない
が、たしかアイガ―東山稜時代の横さ
んが、グリンデルワルト滞在中の一
日、その山荘で万巻の山岳書にうずも

収載されたことなくおわり、谷口君も托した私の筆字原稿も私の手許に居ることもなく、十数年の歳月が過ぎている。収載されなかったことに對して、私としてはとくに不満はもってないし、それが万一著者の考えに基くものであったら、その方が正しいと思つてゐる。だがサーキムレイシヨンの極めて広い新聞に發表された文といふだけでも、それが單行本のようなものに再録されてゐない限り永い年月の間には殆んど忘失されてしまうことは必定である。今日クリリッジの戦後記などは、戦前の會員でも余り多くないのではあるまいか。二番せんであろう

と、何んでもあらうと、残しておきたいと考えるものは、何か一冊の本のなかにちやんと入れておかないと永く伝えることがむずかしいと思うのである。そんな気持が強く私にはあったがために、敢て如上の二文を二番せじを承知の上で採録したのであった。

なお、スクラップのつもりならば巻末の小字欄でよい、と加納さんは言われる。この点は編集者の見識と好みの問題以外ではない。筆者の重みと内容から言って、自ら書物のなかに位置すべき座がきまるので、資料的なものも集録ならいざしらず、巻末に載せるにについては未だに首肯しがたい。

横尾避難小屋
開設のお知らせ

此の度、十一月二十五日付を以て、松本営林署長より、自然保護と近年急増の一面にある山岳避難防止の一助にすることを目的として、上高地国有林横尾地帯に建設を急いでいた横尾避難小屋に、関係者の協力のもとに、完成し、十一月二日より一般に公開利用できる運びになった旨連絡がありましたので、お知らせします。

小屋の位置は、横尾山荘の南に隣接する場所です。

◇ ◇ ◇

の度、十一月二十五日付
営林署長より、自然保護
一途にある山岳遭難防止
ことを目的として、上高
地籍に建設を急いでいたた
が、関係者の協力のもと
十一月二日より一般に公
運びになった旨連絡があ
り、お知らせします。
屋の位置は、横尾山荘の
場所です。

電話（代表） 松本営林署長
松本②四、三〇六

お詫び

去る十二月二日八芳園にて開催されました、昭和四十一年度年次晩餐会の開催通知が、係の手違により（角封筒使用のため、宛名印刷機を使用せず手書きしたために）一部の会員の方に送達漏れがあり、大変御迷惑をかけました。会報紙上を借り、深くお詫び申上ります。

（集會担当理事）



村山雅美

センティネル山脈(南極大陸)

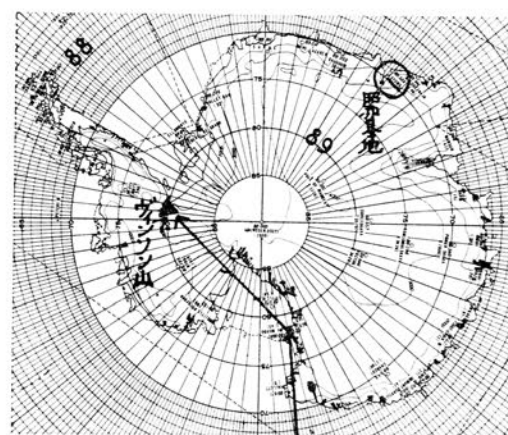
図っていたのである。一方南極の最高峰登頂を計画していたアメリカ山岳会を後援して全米地理協会は南極における科学調査を総合的に計画し実施している。全米科学財団に対し、ウィンソン登頂に次の条件のもとに全米科学財団による科学調査の一環にとり入れさせることに成功したのである。

①アメリカ山岳会は全米から資格、経験豊かな隊員をえらび、1965年12月から6週間、全員1人、輸送重量は人員を含み1人、500 kg 合計5.5 屯の輸送支援を米海軍 43 機動部隊所属第六開発飛行隊があたりウィンソン登頂を計画する。

②限られた範囲とはいえず重要項目として地質調査を登山計画に加えること。

南極大陸は未登攀の最高峰を残す唯一の大陸である。南極大陸の北西の象限、すなわちウェッデル海が深く湾入して南極半島のつけねとなるあたり、南極点から西 1200 km、南西から北東に走る大山脈が 1935 年 11 月 23 日、米国のリンコン・エルスワースによる南極横断飛行の時発見された。しかし 1967~68 年の地球観測年といった間、地上からこの山脈に接近したのも、見たものもなかったのである。エルスワース山脈 (Ellsworth Mts.) の西半分をセンチネル山脈 (Sentinel Range) と呼んでいるが、その最高峰ヴィンソン (Vinson Massif) は海拔 5140 m と推定され、その西に連るタイリイ峰 (Mt. Tyree 4965 m) と共に南極の雄峰として登山の対象として注目をあび出したのもこの数年のことである。

近年ミネソタ大学の地質調査がエルスワース山脈に及ぶにいたり、その周辺の露岩地帯から古代海洋生物の化石を発見した。調査隊は南極地質史の研究のため更に高所から化石の発見を企



設けることになっている。クリンチ隊長は「C130 が我々を氷帽にのこしてとび去った時には、ヒマラヤ遠征の時と異なる孤独感におそわれた。ヒマラヤでは事故がおきれば何時でも後退もできたし、食料や助けを山麓の村に求めることもできた。しかしウィンソンで何かおこったなら最も近いところとて何処か東方にあるバード基地とまず無線でコンタクトしなければならぬのだ」と語っている。

登頂には酸素は使用せず、斜面のゆるい内陸側を狙う様だ。気温は -1°C から -38°C を予想し、 -50°C の低温にも耐える防寒衣服、防寒靴を準備している。

隊員には①アラスカ、メソジスト大学のロング博士 (W.E.)、②ミネソタ大学のエンバース (J.P.)、③コロンビア大学のホルスター (C.D.) の3人の科学者を含み、ロングとエンバースはすでに南極の経験者である。登攀隊員には④エベレスト隊員であったワイオミングのホルベット、⑤シャトルのアン

セル (Dr. J. Ansell) 博士、⑥福島慎太郎氏の令息でシャトル在住の福島栄一 (ワシントン大学助教授)、⑦コロラドのマートン (B.S. Marton)、⑧K2で勇名を挙げたシャトルのショールニグ、⑨ニューヨークからシルバースタイン (Dr. S.C.)、⑩ワシントンからウォルストロム (R.W. Walstrom) といった全米からすぐれた屈強のチームである。

第八次日本南極観測隊の出版にあたりジョーンズ博士 (Dr. T.O. Jones) という人がわざわざアメリカから見おくりに来てくれた。彼こそ全米科学財団の南極調査を含む地球科学研究の最高責任者であり、ウィンソン登山隊を地質調査の一手段として受入れに尽力した人である。博士自身アメリカ山岳会との交渉もあり今回の登頂成功に確信をもっており、登頂成功のあかつきには、来年からセンチネル山脈地域の地質調査を強力に進めるのだと、晴海皇頭をはなれる「ふじ」を眺めながら私に語っていた。



隊員全員が山頂を踏んだとのことである。

尚、登頂者は
Nicolas B. Clinch, Peter K. Schoening, Eiichi Fukushima, Brian Marts, Corbet, Dr. Samuel Silverstein, William Long, John Evans, Charles Hollister.
となっている。

彼らの空輸によってウィンソン山の下に運ばれたのが12月9日であるから、登頂までに12日を要したことになる。その後彼らは、登山技術的にはもっと興味のあるタイリイ峰 (4970m) に向かったという。

又、エベレストへ不法登山を企てたセイヤー (Woodrow Wilson Sayre) が、同じ峰を目指して小さな飛行機でいったが、南極の南端が終点となった。

(吉沢一郎)

編者に、クリンチから送ってきた、アメリカ南極登山隊・一九六六年のマーチ。

A A M E

1966

THE AMERICAN ANTARCTIC MOUNTAINEERING EXPEDITION

Mrs. Clinch

隊長のサイン





★The American (雨男)★ in the North Alps and Daisetsu-zan

Glenn Converse

Mr. Shuya Sekiguchi and I spent five days, from September 3 to 7, hiking in the North Alps and visiting the city of Takayama. We were supposed to have Mr. Hiroyuki Suzuki as a third member, but at the last moment he was unable to come. Taking the conventional route to Kamikochi, we arrived late Saturday evening and had to arouse Mr. Tsugio Hirabayashi, the caretaker of the JAC hut. We were soon involved in a lively discussion, and only the urgency of next morning's early departure ended our first day.

On Sunday, we arose to see clouds encircling all the ridges surrounding the valley. No rain was falling in the valley, but, as usual, as we climbed the rains

were there. True to my name, I was again 雨男. Leaving the serene, beautiful valley of Kamikochi, we ascended Oku Hotaka via the direct Takesawa route.

Hiking was fairly easy to Takasawa hut, which we reached two hours after departure. From here, we had our last view of Kamikochi, sinuous Azusagawa, and the surrounding hillsides. From the hut to the summit of Hotaka, we were enveloped in a raincloud. The route became much steeper, which only added to our discomfort (or at least mine). I tried to use my umbrella, but the wind kept turning it inside out, so I resorted to my rain parka. I'm not convinced that umbrellas are that useful in the mountains, especially when the wind is blowing.

The steep route to the summit and down to the Hotaka hut took four and a half hours to negotiate. As visibility was only 20 meters or so at the summit, we wasted no time there but continued on to the hut, where we could warm up and dry out. Since Mr. Sekiguchi appears to know everyone of importance in the North Alps, we were given a private room. All together, I guess about 15 people stayed there Sunday night.

The food was not so good, but filling. My supplementary supplies more than made up for any inadequacy in our served meals (I have a particular need to eat a lot more protein than is offered at mealtime). Before our early retirement, we watched a film made by a young man who works for the hut. As his sense

of humor was quite good, the sequences we saw of snow scenes and people during the time of Golden Week were often hilarious.

Monday morning, September 5, was beautiful, with all the clouds below us. We could see almost all of the high peaks of the North Alps. What a beautiful panorama. As we trekked onward to Yariyake, we were continually presented with fine views of the many ridges and peaks, as well as of some of the valleys. The weather was excellent all day long. Five and one half hours to Minamidake, with a stop at Takidani to watch some of the rock climbers, and two and a half more to the hut on the shoulder of Yari and, once more, we could rest and enjoy the comforts of civilization perched high on the ridge. Of course, I had to ascend Mt. Yari, where I spent some twenty minutes in solitude and watched as shadows deepened on the mountains surrounding me. Descent, warm food (and quite a bit better than the previous day's), and soon to bed.

Again the morning dawned brilliantly. The cloud cover was everywhere, and topped at about 2500 meters. Far away we could see Mt. Fuji. How I wished we could have stayed one more day, instead of returning to Shin Hotaka. I'll always remember my last view of the Hotaka ridge from Yariyake. There, behind a misty bank of clouds, were the faint outlines of that rugged ridge.

From Shin Hotaka we traveled to Takayama, where we spent

the rest of that day and part of the next. We stayed in an extremely pleasant ryokan situated on the bank of the river flowing through the center of the city. Certainly Takayama is a pretty city, and so clean and quiet. We saw about as much as one could hope to see in less than 24 hours. I especially enjoyed the tall, old-style farm-houses which are so famous. All too soon we were heading back to Tokyo via Nagoya, and ending an extremely pleasant five-day excursion to the Hida watershed and plains.

One month later, from September 30 to October 4, Ejiro Horikawa, toting his Kelly pack and his National Park Ranger green armband (very helpful for receiving extra special service in the mountains), and I visited Hokkaido. An early morning flight, a three hour train ride to Ashikawa, and a marvelous bus ride through Souunkyo valley brought us to Souunkyo village, our resting place for the night.

Right from the moment we were approaching Chitose airport, I was quite impressed by the open spaciousness everywhere. Land stood undeveloped, houses were far apart, roads had little traffic. Trains were only 4 or 5 cars long. Even in Sapporo, I was never conscious of the traffic problems which beset the other major cities of Japan.

Everywhere Autumn was in the air. The days were clear and bright, but there was a chill in the air, the forerunner of colder days to come. The Fall colors

were magnificent, and all those reds, greens, yellows, and oranges will always remain vivid in my memory. Only in New England in America have I seen a similar display of one of nature's grandest works.

Our two-day trip through Daisetsuzan started from Kogen Onsen, up the valley to our first night's lodging at Kurotake hut, then on to the rim of the caldera, off to the peak of Ashidake, and finally down to Yukomanbetsu. Daisetsuzan National Park is vast—vistas stretch south from the caldera for many kilometers. The grandness of scale reminded me of my "own" mountains, the Sierra Nevada of California. The unpleasantly cold night spent at the hut could not diminish our feelings of wonderment and contentment in our snowcovered alpine country. The view from Ashidake was equally magnificent. We could see, on the western flank, the sulphur fumes pouring from the many vents.

Too soon we were in Yukomanbetsu and I regretted once again that I could not stay for another day or two. However, we still had adventures to come, for we headed, on the next day, to Toyako via Shiraori. We visited the Ainu village at Shirai and talked with the people. I was interesting to them because I was as equally as "hairy" as they were.

Unfortunately for Mr. Horikawa, he had to leave early the next morning from Toyako and head back to Tokyo. I stayed on and walked around part of the lake and climbed Showa-

会員通信

「ブータンより」

こちらは稲刈りも済んで、ほんと一息ついたところです。二、三日中に頼

故
山川勇二郎氏筆



んであったヤクの肉が半頭分届くので、今冬からつけた「ルンペン・ストープ」で、すきやきでもしようかと、今から楽しみです。

最近、ときどき日本から食糧品を送ってもらうので、シイタケとか海苔など、日本風な食事を楽しまることもあります。もちろん野菜は豊富にありますが、チキン・ラーメンと、アルファ米が、こちらでは大評判です。

今年三月から、約四・五町歩の農場を運営しているの、なかなか忙しく、この七ヶ月半というものは、かなり頑張りました。野菜は、毎月平均して一〇〇〇ルビー以上の売り上げです。目下、農場内の湧水の近くに池を作り、庭園兼マスの養魚場を作りつゝあります。飼料を与えるとしたら、何がいかがお教え下さい。また参考文献があったら教えて下さい。

九月二日から王妃のお供で、チモラルーの麓へ出掛けました。旅の前半は天候にめぐまれて、チモラルーがよく見えました。仲々よい山です。南面はやれそうです。ツイリム・コンは、二時間ばかりねばりましたが、結局モヤの中でした。残念ですが九月上旬は、やはり雨季で、旅の後半は毎日雨の中、みぞれの中を四千米以上の峠を三つ、四つ、越えました。

この旅は王妃のお供なので王様専用

のヤクに乗せていただきましたが、よく訓練されたものは、トルボのヤクと異って、全く乗り心地満点でした。

最近、知人より河口慧海の「第二回チベット旅行記」を送ってもらいましたが、本当の旅行記がでないのは全く残念なことです。写真が良くないと思いました。

日本山岳会の方は如何ですか。ヨーロッパの山は相変らず盛んなようですが、ネパールの再開はまだまだです。今日は、この辺で失礼します。

十一月十二日、リンプー城気付

(小方宛)

西岡京治

アルバインクラブ訪問

ロンドンを引上げる最後の日に英国山岳会を訪ねてきました。運転手にサウス・オウドレイ・ストリート七四番のところに、ビタリーとA.C.の支園の前につけられたのには驚きました。が、アポイントもとらずに行つたのに、セクレタリーのミセス・ロングランドは大変愛想よく迎えてくれて、談話室、集會室、ライブラリーなど案内してくれて、自分の夫もアルビニストであるとか、義父はかつてのエベレストのメンバーであるとか、自分は雪の山はあまりやらないが、ウエールズの北部で岩登りをやっていたとか、いろいろ話がはずみました。地下室のライブラリーに下りる廊下に歴代会長の写真がずらりと並んでいるのは正に庄巻というべきでしょう。

一九二四年六月七日マローリーがC6からC5のオーデルに宛てた最後のメッセージや一九三三年に見えられたマローリーのアイスアックスとか見せられましたが、こうした英国山岳会の記念すべきものを眼のあたりにすると、さすがにA.C.の伝統と年輪の厚さを大いに感じさせられた次第です。

会員外の署名簿に記名して五・六頁前をめぐってみるとエリザベス女王の署名がありました。はからずも女王と同じ名簿に署名する光栄に浴したわけですが、貴君の一九六一年の署名が眼にとまりなつかしく思いました。

今夜はこの夏出かけたトルコの講演会があるからと誘われました。そういえばジュースなどの飲みものが、たくさん並べてあります。その点J.A.C.よりサービスがよいようです。貴君も御承知のように、ここは各国山岳会の会員章が陳列してありますが、わが日本山岳会のがなかったのは物足りない感じがします。しかしライブラリーには製本された「山岳」がきれいにならんでいるのをみてやはり嬉しく思いま

した。一ヶ月ほど後にツェルマットに行く予定です。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

(十一月十日付 ロンドンにて)

(松田宛)

織内信彦

グリーンデルヴァルト便り

ロンドンでA.C.を見学し、独逸でオーバーバイエルンの山の二端に足を踏み入れ、次いでチロールの一部ミッテヴァルトをのぞいて、パリでは大使館に大野君という領事(彼は法政山岳部のOB)が僕と学生時代からの顔見知りなので、モンパルナスで一晩山の話をし、そして既に冬になったグリーンデルヴァルトで月光に浮かび出されたアイガーを眺めています。四時頃着いたので一人でぶらりとアルピグレンまで行き、額が痛くなるまで北壁を見上げていた。気がついた時にはグリーンデルヴァルトの灯が下の方に点々として、気温もたちまちマイナス一〇度C、しかし良いお天気です。イタリーで一週間過ごしたのち、僕はまたあらためてツェルマットへの旅に出直します。これが楽しみです。

(一九六六年一月二七日)

(望月達夫宛)

織内信彦

ヨーロッパの旅より帰国

大変ご無沙汰いたしました。このたび五月下旬にヨーロッパの旅から帰国いたしました。

今回の旅は、全コース車を使つての気ままな一人旅で、北は北極圏内、ノルウェー北端のエスキモーの国へ、南は太陽の国、イタリー、ローマと九ヶ国にわたり、走行距離も二二〇〇キロ程になりました。

撮影したフィルムは4×5時、6×7時サイズのカメラを主に、6×6、モノクロ、取材は山岳、一般、海岸風景、動物、風俗、都会、建築物、航空撮影とかなり広範囲にわたっておりません。(41・11・15) (風見武秀)

shinzu. Except for a cold wind which came in the morning and lasted all day, my stay at Lake Toya was extremely enjoyable and relaxing.

My last two days were spent in Sapporo sightseeing and visiting the Geophysics and Low Temperature Science Institutes of Hokkaido University. I was impressed with the very pretty campus and the modern buildings. I was able to talk to several of the scientists and assistants and learned quite a lot about the progress of research work, as well as about mountain climbing in New Zealand and central Nepal. Touring Sapporo on foot was also enjoyable and I particularly liked Nakajima Park in the early morning.

Quite obviously Hokkaido is the "New Frontier" of Japan. There appears to be a lot more room for expansion, both industrially and agriculturally. Equally important, Hokkaido, by comparison with the rest of Japan, is underpopulated.

Apparently the Japanese government is encouraging people to come to Hokkaido, but I suspect the more rugged and unfamiliar environment make the Japanese reluctant to start a new life there. I for one, if I were to live in Japan for a longer time, would seriously consider living in Sapporo. It is a delightful, young city in which to live. Need I say that my stay there was most pleasant. It was with some regret that I could spend only one week in Hokkaido, as I had to return on the evening of October 6.

Submitted with warmest regards,
Earthquake Research Institute, University of Tokyo, Tokyo, Japan

☆アラスカ便り☆

— 海外連絡委員会 —
— アラスカ担当委員 —

茅野 赴夫

今アラスカに来ています。今度の旅行は仕事の方が忙しくて、もっぱら山は飛行機の上から眺めるだけで終りました。暖かいカリフォルニアから北へ、シヤトル、バンクーバー、フェアバンクスと次第に雪が増えてきました。来年のアラスカの山の事情ですが、アラスカ大学のカル・ペンソンの話によると次の通りです。

来年はアラスカをアメリカがロシアから買いとって一〇〇年になるので州をあけて百年祭が行なわれ、アラスカ中に、そのスケデニールをかけたボスター1等が掲げられています。そのためにお祭りが(公式には各市町村等では異なりますが、三月一日から十二月三十一日まで行なわれ、米国の Lowland State から多勢の観光客がやってくるというので、特に夏季にはかなりの混雑が予想されるとのことです。

特に登山に関しては、カナダのユニオン州とアラスカにまたがる聖エライアス山群のマウント・ステイール、ルケンア等の通称 Ice Field Range には、アメリカ山岳会が数パーティーを計画しており、一部はカナダ山岳会とジョイントしてこの山城の未踏峰の記念一掃を計画中とも聞いており、この山城に四パーティーが入る予定だそう、そのため六月中旬〜八月上旬には、この山城の唯一の名ブッシュ・パイロット、ジャック・ウィルソンは手一杯となつてしまひ、他はお断りとのことであり、この山城は、この間シヤット・アウトになる可能性がります。

又、マッキンリー地区も多くの予定があるそうで、シニル丹の方もあり忙がしいと思いますので、一九六七年のアラスカは、空輸の問題が例年より

り大変でしょう。今空いているのはアラスカ・レンジ、チニガチの東部の様ですが、アラスカ・レンジは東大山の会が五月に、ボナ地区には、兵庫岳連がシヤトル市のザ・マウンテンニヤーズと合同で五月頃登ることを聞いております。

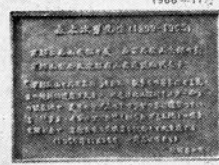
Transportation の問題は単に登山だけでなく、同時期に更に多くの記念ハンティングとか、記念釣り大会などが計画されている由で、ブッシュ・パイロットの不足は大変なものと考えられます。従つてこの地域に入る計画を持っているパーティーは、六月以前に入るか、又はできるだけ早目に、空輸のリザーブをしておくことを考えねばならないと思います。

次にこちらにいる在留邦人の方の多くの人からよく聞くことですが、アラスカを訪れる人が増えるに従つて種々と迷惑をかける人が多くなつていゝ由。特に単独登山、無連絡登山者は禁断期には、密独者と間違えられおそれもある由に、注意を要すると思われまゝ。吉沢氏はじめ、ルームの皆様宜しくお伝え下さい。

(十二月十七日付、アンカレッジにて、松田宛)



故森本次男先生レリーフ
住居(一階)内
1966年11月



周土 碑文
松田 次郎 敬
1966年11月

この記念碑は、小谷隆一、山本勇太郎両氏が、佐藤久一朗氏に懇請されたもので、森本先生の山仲間、教え子がバックアップいたしました。これで、芦屋ロックガーデンにある藤本九三翁のレリーフに続いて、関西に新しい名所がまたひとつふえたわけです。

今秋から、「ウエストン祭」になつて、「北山祭」を毎年とりおこなひ、京都岳界の恒例行事として、峠路と山村に残された先賢者のあしあとを偲びたい所存です。

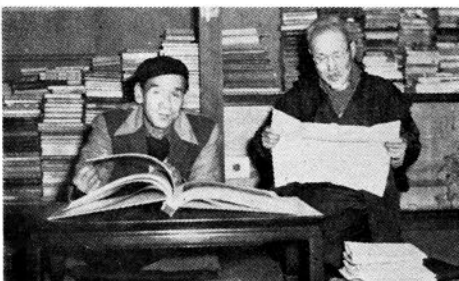
(会員番号五四〇六京都山岳会々員)

京都岳界アルピニズム誕生の地
三十年の風雪に耐えぬいた藤杉荘
(一九六六年十月、京都府山岳会)



・森本次男氏主要著書・

「京都北山と丹波高原」(昭和13年)、「山と漂泊」(15)、「樹林の山旅」(15)、「山・旅・人」(23)、「比良連峰」(36)、「木曽路の旅」(新装・京都北山と丹波高原「39」)以上の他、「京都をめぐる山々」、「白川郷の旅」などあり。



二人の先駆者
故森本次男先生と、故西岡一雄老
(昭和5年10月、藤塚吉太郎撮影)

余滴 「思いどなるな、山男」といわれてもその、思いどなり、というところが、うう意見なことも知らない連中が、人の迷惑になること(自分にはわからないのである)を平気でやっているのであつて、考えてみれば気の毒な存在でもあるわけだ。優勝劣敗とか人達は、自然に對し劣敗し、社会からは不適者として、一足お先にあの世へ旅立ったのかも知れない。われわれとしてはいろんな迷惑はかけられたとしても、山を愛し(う)、山で死んでいった人には一掬の涙なきを得ない。それにしても水泳ばかりに熱をあげずに記録の更新なんかには余り関係のない「山」の方にも関心を寄せ、せめて小学校からでも、登山のやり方について教文部省その他の方々の御一考を煩わしたいものである。

☆☆☆

☆☆☆

☆☆☆

年次晩餐会の記

山崎安治



恒例の年次晩餐会は昭和四十一年十二月二日午後六時半から八芳園で行なわれた。参加者は百八十三名という盛況で、こ

としから会場の配置も十四のテーブルにわけ、各グループごとに評議員が一人会員の相手をするというやりかたも、雰囲気をもり上げる上から成功であった。この一本展

ルム所蔵の絵画の展示などいずれも熱心に見まわる会員で、定刻前からたいへんなぎわであった。

午後七時、加藤泰安常務理事の軽妙な司会で、松方会長から最近の会の事情の説明があった。六月の創立六十周年展、遭難シンポジウム、山日記、山岳、会報についてふれたのち、ことし海外に出た隊は三十隊百八十名、うち二十隊にJACのメンバーが参加し、会として出かけたものは、東海支部アソシカダ、学生部アラスカ、東京支部婦人部のニューランド隊があったと報告があり、最後に新しく名誉会員として高木菊三郎翁、永年会員八氏の紹介と物故会員について報告された。鳥山名誉員の音頭で乾杯をし、食事にはいり、続いて北海道の中野征紀氏が指名された。

中野氏は、北海道にもJAC支部を作ったらいのか、いらないのか、私たちはいらないと思っているが、北海道の事情を説明、横有恒氏は司会からいじめられ通したとの発言に対し

て、私はすこしもいじめてはいない、いじめられているのだと簡単に挨拶して皆を笑わせた。

中屋健一氏は、谷川岳の登山条例にふれ、自分たちは谷川岳に小舎を建て三十年になるがまだ遭難者を出したことはなく、条例には反対だが遭難した人間はほっとけばよいのだと開会前から飲んできたウイスキーの力をかりてとのおだてられた村井米子氏は大喜びで中屋さんから山で死なない方法を教わりたいと、最近行った立山の模様などを話された。

次いでマライニ氏が立ち、なめらかな日本語で、日本は私の二番目の国、引っこしてきたいほどだ、日本から三〇隊も出かけたに聞いて驚いている。成功を祈りたいと述べ拍手を浴びた。

さらに神谷恭、佐藤久一朗、望月達夫、足立源一郎の各氏はこの日会場に掲げられた中村清太郎、石田吟松、石井鶴三、茨木猪之吉各氏の画についてひとこと説明を求められたが、佐藤氏は画のことには一言もふれず専ら蔵王山麓生れの御自分の東北弁について熱心に説明して一同を煙にまいた。

ペルー帰りの坂倉登喜子氏は、自分のアダ名は酒倉トクリ子であると自己紹介、ペルーでは日本女性が大もてで、皆プロポーズされて弱ったり喜こんだりだったと裏話を披露し、遠征に参加した五人の女性でペルーの民謡を唄い会員にサービスした。

日高信六郎氏はこの日永年会員に推薦された京都の小島栄氏の思い出にふれ一高、三高対校野球戦でやじられるとマウンドの上に腕を組んですりわこんでいる色の黒い男がおり、それが小島さんで、自分は一高のマネジャーをしていたが小島さんとは山の話ばかりしていて野球に負けてしまったことがある。小島さんがきょう御出席されないのは大変残念であるとして出られた。深田久弥氏は「この一本展」につい

て一言ふれたあと、来年はもっとこの会を馬鹿さわぎの会にしたい。横さんに島田のかつらでもかぶらせたら実に楽しいだろうと提案。横さんは頭をなでて大いにテレ、会場に爆笑がうずまいた。最後に藤島敏男氏が指名され

ると自分はトロール船のつもりで出てきたのではないと司会者をつりかえしてから、先日新聞社から登山規制をどう思うかと聞いてきたので、どうも思わぬ山には行かなければいけないので、自分のことは自分でという標榜を立てることだと意見を述べ、さらに山は若い者だけのものではなく、一八九六年生れの自分が北岳バットレスを登って話題になったというが、あんなところは

優柔あり草付きありで、ヨーロッパの山にくらべたら何んでもないところだ。七十才でバットレスを登るのもあたり前のことである。近頃は三十代の若さで凡俗の淵に落ちこんでしまう人が多すぎた。一度凡俗の淵に落ちてしまつと中々這い上げられないものであるから、皆さんは凡俗の淵に落ちこまなようにと凡俗登山論を強張して、ことしの年次晩餐会はおひらきとなった。

会の特色が最も強く滲み出す会台が年次晩餐会である。ということとはことしも強く感じられた。今後ともさらに多数の会員の出席を望むと同時に、いろいろの難務を引き受けられた役員各位に会員として一言お礼申し上げたい。

出席者(署名順)
茶谷東海、加藤泰安、高山忠四朗、広瀬武、諸岡一、野口末延、津田周二、小原勝郎、外山義夫、横有恒、足立源一郎、小野敏之、久地岡サナエ、中保、碓井橋造、白石勝敏、大橋晋、川崎蔵、吉武正子、村山雅美、高木菊三郎、笠原藤七、桜井信雄、荻野和夫、川村旭、小里頼忠、山崎安治、神原忠夫、松本熊次郎、鈴木昭、佐藤久一朗、深田久弥、鶴岡元之助、今井喜

美子、三辺夏雄、三田幸夫、牧野衛、岩間利美、二本信次、中西豊和、宮沢章、梨羽時春、松永敏郎、安彦六郎、田口三郎、神谷恭、坂本矩輝、小方全弘、都筑寛、近藤茂吉、沼倉寛二郎、藤島敏男、中野征紀、工業英司、亀井公、西丸震哉、松本善二、河村栄三、安閑庄、目黒一郎、中村謙、大沢伊三郎、松谷光一郎、今西錦司、松田雄一、関口周也、田村協子、見学玄、大島永明、小泉満、片桐盛之助、尹吉炳、栗野可津、佐伯富男、芳野満彦、松浦謙助、青尾主計、山崎金次郎、三浦一郎、林和夫、木下是雄、中屋健一、山本朋三郎、早川義郎、吉沢一郎、小林盛臣、古沢肇、望月達夫、根本洋子、中野満、島山徳成、中尾健児、村木潤次郎、岡村治信、藤井運年、大野真一、佐々木健太郎、杉山孝、田辺章司、石田登郎、徳永芳雄、小林義正、山口健児、牧野四子吉、牧野文子、田崎市松松一名、松方三郎、吉坂隆正、三浦義明、小山勝子、菊地文雄、高橋照、羽田栄治、山本良子、宮崎英子、川端信治、田中正智、折井健一、太田敦、松田柳子、長尾徳夫、大森薫雄、佐藤テール、後藤幹次、若林啓之助、池田光二、横山厚夫、三尾竜民、初見一雄、渡辺公平、高崎定昌、遠藤登、野田憲一郎、村上武夫、山内高明、広羽清、杉田博、渡辺徳、伊藤孝二、清田裕代、神崎忠男、林知孝、辻莊一、中河与一、斎藤かつら、武田満子、三浦多美子、名見郎達男、半沢敏、中島啓、安川茂雄、石原憲治、小倉茂雄、浜野吉生、成川隆顕、中山昭二、小倉重子、鈴木邦之、佐藤佳年、野田三郎、隈部恵子、竹内通雄、吉田久兵衛、田中薫、島田真、須田紀子、富田美知子、入沢文明、黒石恒、山下一夫、マライニ・フオス、川森左智子、坂倉登喜子、滝島清、川喜田二郎、田村扇一、村井米子、倉知数、日下田、大塚博美、飯野亨、細井隆司、(以上一八三名)

会員通信

年次晩餐会の返信の中より、二・三の方の近況を御紹介致します。

一七三〇 浜野正男
大阪に来てから、重ね重ねの御招きに預りますが一向に上京して皆様の顔を拝めず、誠に残念至極に存じます。糖尿と肝臓をいたため、阪大の水野さんのお世話で阪大内科に通院し、漸く放免の如き姿となり、この頃又元気な元の姿になりました。皆様よろしく。

四四二九 吉野正夫
「半蔵を耐えて大地のねぐらかな」こちらは雪が山の小道の紅葉をすっかりおろって、点在する杉の木立が黒々と山あいの谷間を色どっておりまして、何時かは皆様の色どり出来ておられますが、遠方のこと故失礼致しております。

「眺むれば遠山のかたかすかなる霞の衣がせせ風」春風が吹いてかと思いましたが、何時の間にか秋になり冬がやってきました。春の逆巻に一度おいで下さい。新潟県中魚沼郡津南町逆巻温泉 七七九 中村慶蔵

御盛會を祈る。会所蔵の絵画を各自に保管せしむる案は至極名案と思えます。これが会のものであることをよく認識し、且つ見あかず、常に新鮮感を与える為、毎年持ち廻りの制度を加味すれば、一層面白いと存じます。御検討を祈り上げます。

五一八五 須賀太郎
JACの皆様にごぶさたしているのが、今年は出席いたすつもりでしたが、公用と重なり、またまた失礼いたします。

国立43高専のうち山岳部が活動しているのは、本校(豊田工業高等専門学校)だけだと思います。御指導をお願い致します。



図書紹介

—Gentle Wilderness— THE SIERRA NEW ADA

published by The Sierra Club in 1964. Photographs by Richard Kauffman.
Text from John Muir. The design is by David Brower. Color separations are by Richard Kauffman from his color negatives.

東京大学地震研究所で研究のかたわら、一年間日本の山を楽しんでいたダレン・コンヴァースさんが、十二月に離日するにあたり首題の本を、

「To the members of the Japanese Alpine Club: I hope this book will be a good introduction to our mountains. Please come and visit them someday. I will gladly serve as guide!」

という添え書きをして本会に寄贈されたので、本書の内容につき紹介する。
シエラ・ネバダの山々が、案外我々日本人に知られていないので、故郷の山を知って貰おうとの気持ちから、本会に寄贈されたものである。
この本は、シエラ・クラブが刊行し

ている *Sierra Club Exhibit-Format Series* の一つで John Muir "My First Summer in the Sierra" をテキストとし、Richard Kauffman のカラー写真七十六枚を以て構成し、同クラブの専務理事 David Brower のデザインによる一七六頁からなる B7 版の豪華本である。

John Muir は、一八三八年スコットランドのダンバーで生れ、一八四九年米國ウイスコンシン州ボーデー近くの開拓地に家族とともに移住し、ウイスコンシン大学に学ぶも授業に拘束されるのを嫌い、機械發明の仕事に就ける。かたわら中西部とカナダで徒歩旅行を多くし、一八六七年、機械仕事で事故にあつてからは、自然に専念し、日誌を刻明につけながらメキシコ湾まで歩く。(A Thousand-Mile Walk to the Gulf, 1916) 一八六八年にカリフォルニアのエセミチ・バレイに入り、以後ネバダ、ユタ、ワシントン、オレゴン、遠くはアラスカで多くの旅をし、一八八〇年結婚後もさらにオーストラリア、南アフリカ、アフリカへ旅し、水河と森林に関し広い造詣を得て、国家による森林資源保護と公園政策に多大の影響を与え、またエセミチを始め他の地域の国立公園制定に大きな力となった。一九一四年ロサンゼルスで死去するまで、その生涯は自然に親しみ、探究すること終始した。この John Muir をしる「みなぎる光の輝きに」氷のように冷たい峰々にもれる雲間の日、木や岩や雪に燦然と輝く正午の光、朝焼の紅潮に、はげしく落ちる千に及ぶ滝、驚くほど豊富な小枝に、悦び且つ驚き、沐浴して「これぞ "Range of Light" と、わせたシエラ・ネバダに半世紀以上を経た今日、Richard Kauffman は、ノートブックの代りに、カラー・カメラを携えて入り、John Muir が見出したその美しさを見事に再現した。カラー写真は全編にわたりゆったりとレイアウト

され、シエラ・ネバダの美しさを見る者の脳裡に焼きつける。
カラー写真は全編にわたりゆったりとレイアウトされシエラ・ネバダの美しさを見る者の脳裡に焼きつける。朝もやにかすめる岩壁の前面に浮彫りされた樹林のシルエット、花、葉上の水しぶき、樹木の幹、ゆるやかな流れ、はげしい瀬の水しぶき、いまも消えようとするときゆく雪……これらは、シエラの山にのみある美しさでは決してない。我が山の、上高地、横尾、尾瀬等にもよく見ることが出来る風景であるのだが、作者はシエラの美しさを通じて自然の美しさを表現し、自然に対する恋々たる愛情をカラー写真でうたいあげている。これは、みる者をして、その心に引きつけて離さない魅力であると同時に、自然の美しさをいつまでも失わせたくなという欲望を覚えさせるのである。この本は単にシエラ・ネバダの美しさの表現にとどまることなく、自然の美しさを通じて、それが保護されるべきものであるということ、は切実に訴へるものである。
山の写真集といえば、たいがい、きれいな写真を並べて、この山とか、この岩壁といった説明がついているに過ぎない。カレンダー写真をめくって眺めるのと同じ位の興味しかわかないのが常である。しかしながら、この本は斯様な観念を徹頭徹尾に打ち砕いている。本稿のために、頁をくついでいるうちいつか動作の繰り返しになって、始めるのが付いた。終りになるとまた始めから頁をめくり、文章を拾い読むといった調子で、肝心の紹介文が一向にまとまらないものになってしまった。最後に思うことは、大分お金をかけてこのような立派な本（多分日本では一万円ですべての採算がとれない）を刊行することが出来るシエラ・クラブが羨ましい。クラブの創設後一世紀になんなんとする今日に至るも創設者 John Muir の最初の意志が依然とし

て貫かれており、自然を護ろうとする努力が重ねられているということである。自然を破壊してはいけないことは常々よくいわれることである。破壊される以前の美しさを懐かしみ、破壊されつつある現状を愚痴り、憂うる人は多いけれども、これに対して守ろうと努力する人は少ない。シエラ・クラブで刊行したこの本は、少くともこの本を読んだ人達が、自然を破壊しまいと自身の心に誓う説得力をもっている。是非御一読を。
我が JAC でも、自然保護についてなにか具体的な努力をしようではありませんか。
【付記】 Richard Kauffman について。一九一六年ロサンゼルスで出生。幼年期にシエラの山に登り、爾来スタンフォード大学卒業後も続けてシエラ・クラブおよびカナダ山岳会々員として、Sierra, Canadian Range, Alaska, Alps 等で広汎なクライミングを行なう。写真の興味は登山と同時に育ち、次第にバターン、地合い、色彩の相互関係について関心を持つようになった。写真技術はグラフィック芸術に対する彼の愛情と共に進歩した。George Eastman House, the Los Angeles County Museum, the Palace of the Legion of Honor in San Francisco, the San Francisco Museum of Art でワシントン・ムーアを開催した。
この本の製版のためのカラー・セパレーションは自宅の暗室で彼自身の手によってすべて調整されたところから、驚きである。（関口周也）

一九六五、六六年泊山岳会中部ネバール踏査報告

薬師義美編

中部東ネバールの広範囲の踏査報告である。
「序にかえて」と題し巻頭に泊山岳会の代表山哲朗氏が、帰国後半年にして報告書を出せるようになったことは、内容はともかくとして、小さな個人的な隊とすれば、スピーディなしくくりだったろうと思う。大きな立派な遠征隊でも、一冊のものをまとめ、報告をしていないのが多い中で、これは少しは誇っていいのではないかとさえ考えている。だがその費用は一人をネバールに往復させるほどかゝるとすれば、なかなか容易ではなく、頭の痛いことである。とつくづく、と述懐しているが、本当にその通りだと思う。山本代表は、内容はともかくとしてと遠慮しておられるが、この報告書の内容は記録的にみても中々貴重なものである。
内容は一部・二部に分れて収録されているが、第一部「計画と背景」はこの計画のなりたちについて詳細に述べられていて大変に興味深い。遠征とは一種のドラマであるという感じがつくづく感じられる。こういう地方事情は各隊でも大なり小なりあるものと思われる。その点でこの報告書は赤裸々に述べているので、地方で遠征隊を組織することが如何に大変なものであるかという点を知る上で大変に参考になる。第二部「記録」は八月二十一日に神戸港を出て以来六ヶ月半ぶりに三月六日神戸港に帰国する迄を一〇三頁に亘り詳細に報告している。特にテリツォの偵察の箇所と九枚の詳細な地図は貴重である。
第三部「資料、その他」は、装備、食糧、医薬品、写真、梱包、輸送、ボーター等の報告の他に「テリツォに関する資料」、「テリツォ測量のこと」がある。「テリツォに関する資料」では薬師氏が、この山を登山の目標として発見してから、この山についての（次頁下段へ）

支 部 情 報

東京支部

十一月二日(水)役員会
出席者 石原、沼倉、野田、村井田、
広谷、小味、関口、大西、鈴木和、
鈴木郭、富田、武田、野萩。
議事

(1)支部二十周年記念行事の件

(イ)記念パーティー報告

(ロ)記念品製作報告及び頒布促進方策の検討

(ハ)記念山行準備経過報告

(ニ)遭難発生原因に関する討論会につき、会場の都合でしばらく延期とする。

(ホ)各行事に対する資金調達問題の対策検討

(2)十一月三水会の件

本部の調査研究委員会及び学生部と共同で第三〇回小集会「なだれについての研究会」とする。

(3)支部傘下団体の岳連加盟についての対岳連打合会の報告

(4)婦人部有志によるニュージールランド登山隊の経過報告 準備は順調に進み十一月十三日神戸出航の予定、隊員より挨拶あり、一同乾杯して壮途を祝した。

東 海 支 部

◆一九六六年度支部役員・委員

東海支部では八月十二日役員会を開催し、一九六六年度の役員を決めた。

(カニ内は担当)

支部長 石原国利

副支部長 原 真(会報)

常務委員 田中 元(支部通信会報)

中世古隆司(支部通信)

会計監事 木村哲夫(写真展)

委員 大橋喜治(会報)、小栗喜浩(会報)、兼田喜代治(支部通信)、沖元人(図書)、佐野孝(三重連絡)、鈴木重彦(写真展)、田村俊介(東京連

絡)、都竹勝(岐阜連絡)、吹原俊二(庶務・会計)、本多善博(図書)、矢入憲二(支部通信会報)、吉川友章(会報)

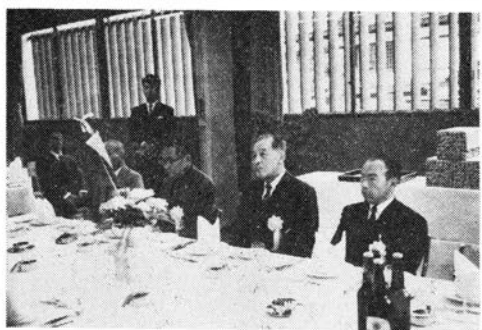
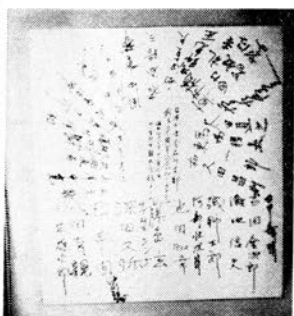
(支部通信一九六六・九より)

石川支部

創立二十周年記念行事

石川支部は昭和二十一年創立以来本年で満二十周年を迎えたので、それを記念して十一月六日金沢市に於て記念行事を催した。当日午後一時より金沢市観光会館に於て講演会と映画の会を開催。当県出身で支部の先輩深田久弥先生の「シルクロードの旅」の講演・スライドがあり、引続き同旅行に同行して撮影の朝日放送製作映画「シルクロードの旅」を上映した。大集会室に参集の会員及び一般の熱心な聴衆に多大の感銘を与えて盛会であった。

そのあと五時より同会館グランドで記念の式典とパーティーに移り、先ず小林支部長が二十周年を迎えた喜びと支部の経過の概略を述べて挨拶、続いて支部の設立及び支部の今日を築き多大の功勞のあった初代支部長阿部杜次郎氏、二代池田知幸氏、三代磯野三郎氏にそれぞれ感謝状と記念品を贈呈して謝意を表した。そのあと本部を代表されて深田先生、越後支部長藤島玄氏、松本石川県高体連山岳部長の祝辞を戴き、各方面からの祝電の披露があつて式典を終りパーティーに入る。式場には昨



年六十周年記念に本部から贈られたJAC旗を掲げ、テーブルには菊花をはじめ秋の草花を飾るなど記念式場になじむ装飾がなされた。

祝宴の間阿部氏は創立当時の思い出話を、磯野氏は創立者の一人として二十二年の第二回金沢国体開催に当り、山岳部門の運営を本部から委任されることになって支部を結成、初めての登山行事を前例もなしで行ったことの苦心談を語り、会場も最初は白雪を計画したが、開催の時期には既に新雪も来るして白雪を取り止めて、加越国境の匠王山(九三九・二m)に変更した。登山形式も山麓五つの登山口から頂上へ集中登山をしたが、幸い秋晴れに恵まれ、全国十都道府県からの参加選手二百余名によつて初の国体登山が行なわれた当時を感慨深く話された。池田氏も長年支部長としての思い出や支部の歩みをニューモアたづなに披露、現役の支部中堅の面々の抱負など一人一話が続ぎ、酒を飲み交わし、の懐旧談も賑やかに過ぎた。幕を閉じた。そのあと席をかねて有

志の二次会となり、唄うは踊るは一同童心にかへつての一夜は亦楽しかった。一方石川県社会教育センターロビーでは十一月一日から六日まで二十周年記念山岳写真展を開催した。会員馬場勝嘉、香村金次郎氏の写真を中心に支部会員より出品の大型パネル張りの写真を陳列、連日多数の観覧者で賑わった。

尚記念行事の一環として支部会報特集記念誌を発行すべく目下編集集中であります。(竜田与三三記)

出席者(順不同)

(来賓) 本部深田久弥氏、藤島越後支部長、松本石川県山岳協会長、八田石川県高体連山岳部長、阿部杜次郎、池田知幸、磯野三郎各前支部長、小林雄次郎、増江俊三、灘地信夫、東一郎、石田健、酒井治夫、橋本吉、真田昌孝、馬場勝嘉、香村金治郎、原孝治、吉田金次郎、和久田昌則、太田直之、西田貞夫、岩谷浩三、小島三郎、田中嘉明、村瀬栄一、川江徳次、市村統治、浅野光正、田中重輔、藤井洋和、林正勝、関隆夫、武田直喜、山岸幸寛、山元毅、沢村真治、中川利雄、福久米之助、竜田与三三。

ユーコン登山百年隊

(Yukon Alpine Centennial Expedition)

一九六七年は、丁度カナダ連邦の成立と、アメリカがアラスカをロシアから買収した百年目にあたるので、ユーコン准州(Territory)政府と、カナダ山岳会が共同で、「ユーコン登山百年隊」をセント・エライアス山群のIcefield Rangesへ派遣することになった。

その登山活動は次の三部に分れる。一、一二人のカナダの登山家が一組となり、未踏の一二峰に登り、カナダの一二の州(Province)及び准州の名をこれらに冠する。

(前頁より)
文獻、写真調査、外国への間合わせの往復文書を公表しているが、中でもこの山についてのライバル、リオネル・トレイ氏の手紙は印象的である。

尚卷末には Reconnaissance to the Tliliso lake in the North of Annapurna and Exploration in the Central Nepal Himalaya と題して English Summary が、収録されているが、当然のこととはいえ、本書の価値を国際的に一層高めている。収録されている写真も記録的にみて価値あるものが多い。

最後に本書の読後感について述べると、さすがに著者の報告書だけであるという一語につける。そして一刻も早く、この隊に早くティリッソ・ピークを登って貰いたいということである。尚本書は非売品ではあるが、送料共六〇〇円を添えて左記へ申込み、残部を頒布して貰える由である。

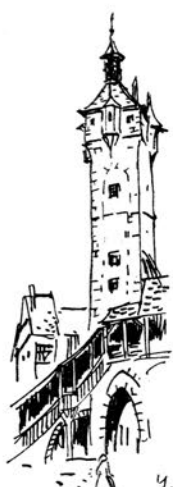
一九六六年十一月、泊山岳会中部ネパール踏査隊発行、A5版横組み一五四頁、写真一五葉、地図八葉、巻末アンナプルナ・ヒマールの付図一葉。

(申込先) 富山県中新川郡朝日町殿町、鹿熊武方泊山岳会(松田)

(注・これまた Mr. Alberta が出来る可能性もある)

二、加米合同隊が、たまたま同じ年にあたるカナダとアラスカの百年を祝う、国境にある処女峰に登る。これは、バンクバーピーク(四七五五m)で、それを南側から登る。六月から七月にかけて行なわれるが、技術的には可なり難しいらしい。

三、アイズフィールド山脈に設ける登山根拠地には、有資格登山家の参加を要請する。アメリカ側の資格者はA A Cで選考するところ。(吉沢)



『新名誉会員紹介』

昨年十月七日の役員会で決められた「名誉会員推薦等に関する内規（会報二四五号参照）」にもとづき、十一月十日の評議員会において、今年度は、高木菊三郎氏を名誉会員に推薦することを決め、年次晩餐会の席上、松方会長より発表されました。

以下に高木新名誉会員の略歴と、その主なる登山歴を紹介致します。

高木（旧姓斎藤）菊三郎氏
明治二十一年十月二十七日東京都文京区本郷菊坂町に生れる。

・主な山歴

明治四十一年高尾 景信・陣場山

同筑波山

明治四十三年武州御岳、大岳山

明治四十五年妙義山、奥山

大正五年麓山

大正六年秩父武甲山

大正八年鹿野山

大正十年赤城山

大正十三年戸隠山、高原山

昭和三年八甲田山

昭和五年甲州御岳

昭和九年北朝鮮狼林山

昭和十年富士山

昭和十五年霧島山

昭和十九年上高地

主な経歴

明治三十九年六月陸地測量部奉職

大正二年御大札記念三府図式懸賞

応募一等賞

大正十年陸地測量手に任ぜられ国内

国外邦図、臨時図の主任となる

昭和十八年
陸軍技師、
陸地測量部
員に補せら
れた。

昭和三十三年建設省建設研究所講師として地理学担当。

昭和三十三年文部省指定教育映画「伊能忠敬」の製作に関し千葉県教育長より感謝状を受けた。

昭和三十六年山岳功労者として厚生大臣より感謝状、読売新聞社より表彰状を受けた。

昭和三十七年東北大学に論文を提出理学博士を授与された。

昭和四十年文部省全国中学校「道徳の指導資料」第二集に理想的人物として選定された。

山岳会での活動

明治四十一年入会（会員番号一六二）

以後数年間山岳大会に当地地形図未刊であったとき、山岳登山啓蒙のため、古地図、錦絵旅行記、紀行その他山岳文献を出陳した。

昭和三十八年「山岳」五十八年に山岳会と日本アルプス地方三角測量の思い出を寄稿

昭和四十年十月、本会永年会員として表彰される。

著書

日本地図測量小史（昭和六年古今書院）

地形図概論（昭和十八年山一書房）

日本における地図測量の発達に関する研究（昭和四十年風間書房）

（山崎安治）

アンカットの「山岳」61年号

御希望の方へ

右御希望の方は至急本会事務局まで御申出下さい。

尚、発送後アンカットに交換を御希望の方は送料を申受けます。

会務報告

12月理事会議事録

日時 十二月一日（木）六・四五〇
場所 本会ルーム
出席者 松方会長、三田副会長、渡辺副会長、理事・加藤、辰沼、松田、飯野、宮下、川崎、住吉、小方、長尾、竹田、平山、広谷、倉知（三枝）

常任評議員・島田、藤井
東京支部・沼倉
（以下委任）理事・大塚、常任評議員・望月、中尾、佐藤

△議事

(1) 年次晩餐会開催の件
十二月二日午後六時三十分より、芝白金の八芳園にて開催の予定。式次第、テーブル配置等につき検討する。

尚十一月の理事評議員会の席上、本会所蔵の絵画を、会場に展示し、希望者に貸出しして保管を依頼することを決めたが、本件につき種々検討の結果、現ルームで保管に困難を来しているのは、加賀氏寄贈のA50号、A25号の大きな絵二点で、他は現ルームで保管は可能であることが確認されたこと。年次晩餐会の通知には貸出しすることを通知してしまつたが、この点は年次晩餐会の席上お詫びして諒解を求めることとし、本件は次の様に訂正することとした。即ち、ルームの倉庫に保管されている絵画を展示公開し、この中、前記二点のみに関し希望者があればお貸しすることにする。

「この一本展」については倉知理事より出品点数が少ないので、申込んでない者でも、当日会場へ持参願いたい旨要望あり。

尚集会担当の川崎理事より、最近晩餐会等の会費は高くなつており、立食の場合はともかく、席につく会の場合には、出席の返事を述べていて欠席されると、その分については調整すること

とができず、非常に困るので、出席の返事を述べていて当日開会迄に連絡せずに欠席した場合には、会費を徴収しても宜しいかの提案あり、本件種々検討の結果、現在の会の財政上からみて止むを得ないということで、本件は承認された。

(2) 備品貸出規定案検討の件
次回理事會迄に再検討する事にする

(3) 山岳遭難シンポジウム内容検討の件
毎日新聞社並びに東京放送より後援がきまつた。

内容については、山岳遭難の原因につき、従来より検討されていること以外に、人間の側に何か見落している点があるのではないかとの見地より登山者の側の環境、その他の背景につき、哲学、心理、生理、社会学、教育、行政の面から、それぞれの専門家の立場より検討してもらい、その後、高校生、大学生の転落事故の具体例につき、ティーチ・イン形式で討論することを確認する。尚このシンポジウムに使用する資料は、当日迄にプリントすることにする。

(4) 知床の自然保護に関する要望書の件
本件については十一月十六日付、北海道自然保護協会々長より、文書を以て正式に要望書が届いたので、主催団体である日本山岳協会に対し、善処方を要望することを決める。

(5) 山日記編集方針検討の件
63年号の編集の方法につき、常務理事会で検討した案につき飯野理事より説明あり、承認する。

(6) 山岳広告の件
募集の状況につき担当竹田理事より説明あり。

(7) 其の他

① 山梨支部臨時總會（12月11日）に講師派遣方要請の件。……ペルー・アンデスについての要望あり、早大ペルー・アンデスの隊員に依頼することにする。

② 静岡支部創立十五周年記念会（12・11日）は、藤島氏に依頼する。

③ 横尾遭難小屋設置の件
松本営林署より、11月20日より公開利用できる旨連絡あり、使用規定が送付されてきたので、会報にて通知することにする。

④ 雪霜研究会、報告

⑤ 在日外国人登山家との交歓会報告。

⑥ 日本建設協会に対し、現ルームに隣接する室の提供方、依頼状を出すことを定める。

⑦ 其の他、条例問題等につき意見交換

常務理事會

日時 十二月十九日午後六時三十分

場所 日本橋電氣館

出席者 加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、川崎各常務理事

△議事

(1) 新入会員申込八名の入会承認

(2) 山岳遭難シンポジウム会計報告の件

(3) 東海大学より後援依頼のあった「ネパール民族美術展」は、本会後援名義を使用することを承認することに決定

(4) 東海支部より開合のあった支部長の件は、庶務担当理事より連絡することにする。

(5) 年次晩餐会に出席通知を出して無断欠席の会員より会費を徴収する件は、今年には事前に通知していなかったこともあり、中止し、今後徐々に、この様な習慣をつける様に努力することを確認する。

(6) 本会所蔵絵画貸出の件
A50号、25号の二点の貸出については、信濃支部より、松本の自然博物館にと、他に、三辺夏雄、小野敏之氏からも借用方申出があったが、今回は個人でなく、公共団体に貸出す方針として、信濃支部にその旨、連絡することにする。

(7) 会費滞納者に会費督促方連絡の件、再度連絡することにする。

(8) 山岳61年号の件、

（奥付の上へ続く）

Ⅲ 新永年会員紹介Ⅲ

本年を以て、本会在籍五十年に達した左記八氏は、十二月二日芝白金、八芳園で開催された年次晩餐会の席上、永年会員として表彰され、永年会員章が贈呈されました。

関西在住の小島栄、塚本純一の両氏は残念ながら出席頂けませんでした。在京の六氏は元気な姿を見せて下され、出席者全員より拍手を以てむかえられました。

以下簡単に新永年会員八氏の横顔をレジスター資料をもとに紹介致し度いと存じます。

四五〇 小島 栄氏（一九一六年二月、高野鷹蔵氏の紹介により入会）

明治二十二年七月二十九日、横浜市に生れる。（79才）神奈川県一、三高、京大出身、三高山岳会、京大山岳部創立者。

・山歴

明治より昭和にかけて、富士山三十回登山、明治年代、燕岳、槍、穂高、乗鞍、御岳、白馬、焼、針ノ木、立山、木曾駒、甲斐駒、北岳登山。大正時代、赤石、悪沢、白峰三山、地蔵、鳳凰、仙丈、荒川岳などに登る。

・「山岳」への主な寄稿

野呂川の山と谷、山岳9ノ3。
四五六 塚本純一氏（一九一六年三月入会）

戦前より終身会員として在籍。

四五九 松本善二氏（一九一六年四月高野鷹蔵氏の紹介により入会）

明治十四年十月四日生（81才）、「霧の旅」の古いメンバーである。

・主な山歴

大正年間に槍ヶ岳、白馬、杓子、鎌、丹沢山塊初縦走、阿能川岳、蓮峰、三国山縦走。

昭和八年朝鮮金剛山

昭和九年台湾新高山登山

戦後も八溝山、石鎚山、利尻島など

各地の山に登る。

・「山岳」への主な寄稿

焼山より丹沢山塊縦走 山岳14ノ3
秩父笠山より丸山へ 山岳20ノ1
上越境の山とその地名 山岳25ノ3
昭和六年、八年、本会理事として会務に尽力された。

四八九 辻 莊一氏（一九一六年七月入会）

明治二十八年十二月二十日、岐阜県に生れる（71才）東京帝国大学出身。

・主な山歴

中学三年頃より木曾御岳、穂高、槍、白馬に登山、立教大学山岳部長として昭和十一年ナンダコット登山を計画する。

・「山岳」への主な寄稿

大隅高隅山登山談 山岳12ノ1
その他山岳雑誌、立大報等に寄稿多数

戦後、本会評議員を歴任。

四九〇 目黒四郎氏（一九一六年九月入会）

明治三十年八月二十五日長岡市に生れる（70才）

・主な山歴

大正初期、妙高、火打、尾瀬、会津駒、越後駒、後立山、立山、乗鞍、焼、霞沢岳、穂高岳などに登山。

早大山岳部創立者。氏は多年に亘り目黒書店、日地出版等出版界にあって、山岳図書の出版で登山界に貢献した。

四四四 田中 薫氏（一九一六年九月入会、旧会員番号四九五、↓一〇一三）

明治三十一年六月十一日生（69才）

・主な山歴

長らく神戸商大の山岳部長として、北アルプス、台湾の山等を登り、一九五八年には、神戸大学バタゴニア探検隊に隊長として参加。

・主なる著書（登山関係）

台湾の山。大氷河を行く。

五一三 大島永明氏（一九一七年二月入会）

五二一 佐々木健太郎氏（一九一七年三月、高野鷹蔵氏の紹介により入会）

明治二十七年六月十三日生（73才）、

（山崎・松田）

「追記」

アルパイン・レジスターのカードを御返送戴いてない方については、資料がなく、残念乍ら詳しく紹介することができませんでした。この機会に更めて記入方、お願い致します。

ルーム当番日税表

『台湾登山報告集』合本のお知らせ

(松田)

1 月					2 月				
5	木	宮	下	辰	沼	1	水	支	部
6	金	竹	田	細	井	2	木	理	事
7	土	網	倉	松	和	3	金	倉	倉
8	月	村	崎	鈴木	藤	4	土	沼	田
9	火	川	加	加	会	5	火	松	谷
10	水	支	部	員	会	6	水	加	藤
11	木	理	事	会	会	7	木	図	書
12	金	広	谷	大	塚	8	金	堀	永
13	土	小	川	関	口	9	土	松	丸
14	火	堀	丸	野	田	10	火	西	三
15	水	西	水	会	尾	11	水	水	水
16	木	須	海	永	12	木	村	村	富
17	金	飯	外	知	13	金	海	外	田
18	土	沼	連	村	14	土	小	方	内
19	月	倉	絡	井	15	月	鈴木	郭	味
20	火	田	員	部	16	火	折	井	小
21	水	富	会	部	17	水	婦	戸	野
22	木	折	井	竹	18	木	野	萩	野
23	金	小	井	内	19	金	大	西	井
24	土	宮	下	萩	20	土	宮	下	知
25	火	大	西	野	21	火	関	口	山
26	水	辰	沼	山	22	水	辰	沼	和
27	木			井	23	木			
28	金				24	金			
29	土				25	土			
30	月				26	月			
31	火				27	火			

- 海外渡航の自由化により脚光を浴びた台湾登山は、一九六四年度一、二隊延六十四名、一九六五年は一月一三日の間だけで七隊延四十二名と盛況を極めたが、一九六五年四月になって中華民国政府の入山管制法規が改正になり、(会報二四〇号参照)台湾登山は事実上禁止されるに至った。しかし、その後、一九六六年の一月に入山規制が緩和され(会報二五一号参照)るに及び、最近台湾登山に関心を持つものが非常に多くなってきた。そこで、これから会員の便宜を計るため、此の度台湾登山関係の報告書を集めて合本したのでお知らせ致します。収録されている報告書は左記の通りです。
- 記
- (1) 中華民国台湾省体育会山岳協会概況
 - (2) 日本山岳会静岡支部一九六三年中華民国訪問親善登山隊報告書
 - (3) 一九六三年日大山岳部中華民国台湾省山岳登山隊報告書
 - (4) 一九六四年天理大学ワンダーフォーゲル部訪華友好ワンデリング隊報告『台湾』
- (5) コンテニアス・クラブ、一九六五年台湾合宿報告書
- (6) 一九六五年山梨県山岳連盟訪華友好登山隊報告『台湾の山と人々』
- (7) 一九六五年大垣市山岳協会台湾玉山登山隊報告書『玉山への道』
- (8) 千葉大薬学部のはな山岳会中華民国台湾省学術登山隊報告書
- (9) 亜細亜大学山岳部部報第四号
- (10) 中華民国台湾省への登山手続について。(松田)
- (一三頁下段より)
- (イ) 定価は一八〇〇円に値上げする
- (ロ) 発行部数は本会で入票基本部数を二六〇〇部とし、これに茗溪堂の必要部数を加算した上で決定する。
- (ハ) 昭和四十四年度新入会員にも山岳61年号は特別に頒布することに決定
- (ニ) 山岳62年号の件
- (ホ) 望月評議員より早急に担当理事を決めて、原稿を依頼する必要があるとの要望がなされており、この件につき、編集者 内容等につき討議した。
- (ヘ) 一月の理事、評議員会は一月十二日(木)に開催することを決める。

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端2~15、電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい昭和四十二年一月十日発行
東京都渋谷区神宮前
三ノ三 外苑コーポ内
発行所 法団 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
頒価五十円
印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地
電話(03) 六五〇一五
振替口座東京四八二九番

後編集

脚を使わず、山に暮れ山に
明けたと思ったら、新聞で
松方会長夫人の急逝を知っ
た。この会報の割付一頁を残し、早速
四谷のイグナチオ教会へうかがう。流
石の會長の眼も赤かった。☆第一頁の
上段の構成一寸変えてみた。何か御意
見があったら御申出願いたい。一人位
何とか反響があってもよさそうなの
の。☆織内君が痛い話を土産に帰国。
早速原稿依頼。乞御期待。(吉沢一郎)

あなたのネガから、大型パネル(枠)張り

お部屋の飾りに! 贈りものに!

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話(611) 7047

あなたのネガから、明快なコントラスト適
切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パ
ネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料150円同封でご注文下されば
到着後5日以内に製作発送いたします。
代金は着品後10日以内に送金下されば
結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊
社で負担いたします。また、特にトリミング
をご希望の方はその旨明示して下さい。
但しネガ不調のため作品にご満足頂けない
と思われる場合には、ネガ、代金、返送料と
もそのまま直ちに返送申し上げます。

- 全紙半切 パネル張り ￥1,000
- 全紙 (新聞1ページ大) " ￥1,500
- 全紙2倍 " ￥4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご
注文の際は、ご照会下されば別にお見積
り申し上げます。